

—「生きる力」(2) 何にいちばん感動して「生きる力」にしていくか?—

百田尚樹(ひゃくた・なおき)●1956年大阪生まれ。同志社大学中退。関西の人気番組「探偵! ナイトスクープ」のチーフ構成作家。2006年『永遠の0』で小説家デビュー。『ボックス』『風の中のマリア』『モンスター』『リング』『影法師』『錨を上げよ』など著書多数。『永遠の0』は100万部を突破、2013年12月公開予定で映画化された。

百田尚樹:作「海賊とよばれた男」

「海賊とよばれた男」上:(第一章、第二章)380ページ 講談社

「海賊とよばれた男」下:(第三章、第四章)362ページ 講談社

—目次—

第一章 朱夏(昭和20-22年)=(1945~1947)

1. 誠首ならん!、2. 苦闘、3. ラジオ修理、4. 東雲忠司、5. GHQ、6. タンク底、7. 公職追放、8. 石統との戦い、9. 武知甲太郎、10. スタンバック、12. 逆転。

第二章 青春(明治18-昭和20年)=(1885~1945)

1. 石油との出会い、2. 日田重太郎、3. 丁稚、4. 生家の没落、5. 士魂商才、6. 海賊、7. 満州、8. スタンダードとの戦い、9. 危機、10. 仙厓、11. 世界恐慌、12. 上海、13. 日中戦争、14. 石油禁輸、15. 南方へ、16. 敗戦。

第三章 白秋(昭和22-28年)=(1947~1953)

1. 正明、2. セブン、シーズ、3. 進水、4. 新田辰夫、5. イラン石油、6. 極秘任務、7. モサテグ、8. 決断、9. サムライたち、10. 「アバンダンへ行け」、11. 輝く船、12. 倭寇、13. 俯仰天地に愧じず、14. 完全勝利。

第四章 玄冬(昭和28-49年)=(1953~1974)

1. 魔女の逆襲、2. ガルフ石油、3. 奇跡、4. 海底パイプ、5. 日田重太郎との別れ、6. 悲劇、7. 石油連盟脱退、8. 「フル生産にかかれ」、9. 国岡丸。

—あらすじ—

第一章 :戦争直後の話。

戦前、朝鮮や満州、中国で幅広く事業展開していた国岡商店は、日本の敗戦で海外の資産をすべて失いゼロから再スタートした。海外からの帰国社員を一名もクビにせず、ラジオ修理や海軍の巨大な石油タンクの底さらいなど、なんでもやったという話が、国岡鉄造の「誠首ならん!」という言葉で紹介されている。(海軍タンクに残っている廃油底さらいは、専門業者でも嫌がる危険な作業だったが、国岡商店の社員は、幹部社員でもホワイトカラーでも嫌がらずに真っ黒になりながらやりとげた。

そのことが、GHQも注目するところとなった。国岡鉄造は、一旦、公職追放されたが、GHQが見直しすぐに取り消されることとなった。

第二章 :国岡鉄造の生い立ちから、戦前、戦中まで。

国岡鉄造は明治18年(1885年)に福岡県宗像市赤間に生まれた。家(染物業)は貧乏だった。父親に反対されながらも、何とか福岡商業(福岡市立福翔高校)、神戸高商(神戸大学)を卒業。

神戸高商の校長よりの色紙「士魂商才」が、鉄造の座右の銘となった。鉄造は卒業後社員数名で小麦と機械油を取り扱う神戸の個人商店に入社。独立を考えていた鉄造は小さな会社で、すべての技能を身につけることを選んだ。

台湾向けに、小麦粉の販路をつくるなど、数年で大きな成果を上げ、出身地の門司で親族、家族を社員として国岡商店として独立する。明治44年(1911年)、25歳のとき。

日邦石油の機械油の取り扱いが主な事業で企業するときに神戸で知り合った支援者の日田重太郎から独立資金(6000円)をだしてもらった。日田重太郎には、その後も国岡商店が潰れそうになった時に

追加支援をしてもらい、鉄造の生涯の恩人となった。ちなみに、鉄造は日田の恩義に感謝して、1970年には、日田の出身地の兵庫県姫路市に製油所を設置し、番地名を日田町と命名している。

紡績工場のスピンドル(糸車)の軸受油(独自調合)で、大手紡績工場から大量受注した。また、漁船の燃料を灯油から、税金のかからない軽油に転換させて大成功した。

国岡商店は、門司の販売店で、対岸の山口県には売れなかった。そのため、門司側から伝馬船に軽油を積んで海上で漁船に売るという方法で販売を拡大させた。

これが「海賊とよばれた男」という、この本のタイトルの由来だ。

国内では自由な事業展開が難しかった。そのためセブン・シスターズと呼ばれるメジャーが牛耳っていた朝鮮や満州、中国で事業を展開した。(極寒の満州でも凍らない車軸油をつくり、メジャーに勝利)。

何事にも筋を通す鉄造は、国がつくった石油統制会社などにも反対したため、石油業界の異端児と見られていた。米国が日本向け石油の禁輸に踏み切ったことから、日本の石油流通は石油配給統制会社に一本化されてしまった。

――初代「日章丸」――

鉄造のユニークな点は、単に石油販売のみにあきたらず、自前のタンクを上海などで建設するとともに、自前のタンカーを持つことだ。1939年には、自社タンカー「日章丸」が完成している。

「日章丸」は戦時中徴用され(全部で3隻)、1944年にアメリカの艦載機の爆撃で沈没した。

第3章、第4章:戦後の復活

――2代目「日章丸」:1万8千トン 当初、アメリカから石油製品の輸入に使われ、アメリカ製のガソリン「アポロ」の商標で人気を博した。

メジャーは日本の石油会社の多くを直接・間接に支配しており、政府からも言うことを聞かない会社と目をつけられていた国岡は、13対1のような戦いを強いられていた。その国岡の武器がタンカーだった。

――1951年にイランがイギリスの国策会社アングロ・イラニアン石油の全施設を接収したところ、イギリスはイラン産の石油は自国のものだと主張し、イラン石油を輸送するタンカーを拿捕した。

――そんな中で、「日章丸」は1953年4月にイギリスの警戒網を潜り抜けて、無事イラン産ガソリンと軽油を輸入した。これがイランが石油施設を国有化してから、最初の輸出となった。

――その後、イギリスはアメリカと組んで、両国でイランの石油を抑えにかかり、1953年8月にCIAがわずか70万ドルのコストで、政権転覆させ、シャーを復帰させて新米国に転換させ、国岡の優先権は半年で終結した。(以下省略)

―― 異端の経営者、出光佐三をモデルにした人物が主人公の本書が、第10回本屋大賞の第1位に輝いた。読者の多くが「人は何のために働くのか」「働くとはどういうことか」を考え直したという。著者の百田尚樹氏に作品に込めた思いを聞いた。

社員は家族であり、会社の最高最大の財産

――主人公、国岡鐵造に感銘を受けた読者が多かったようです。

国岡鐵造、すなわち出光佐三は今の経営者たちと対極にある。大きな違いは、社員を正真正銘の家族だと考えていることだ。タイムカードなし、出勤簿なし、定年なし、は有名だが、一方で労働組合も残業手当もない。近代的な企業概念とは懸け離れ、江戸時代のでっかちという感じもするほどだが、出光にしてみたら、経営者と労働者は対立するものではなく、共に手を携えていくものなのだ。君にこの仕事を信頼して任せているのだから、しんどかったら自分で判断して休めばいい、という考え方なのだろう。

今の経営者と決定的に違うのは、社員を会社の財産だと考えたこと。終戦直後、重役たちがもう会社を畳むしかないと言った時、「何をがっかりしている。一番の財産がまだ残っているのではないか」と励ました。

――還暦での再出発でした。

60歳でほとんど財産を失った男が復帰してきた全社員を鼓舞した。その力強さと勇氣に頭が下がる。戦中までの出光は海外事業がほとんどで、すべてを失った。大財閥会社が軒並みミストラを行っている中で、出光は反対を押し切って一人もクビを切らないと宣言し、実際にそれを行った。

——一番の財産？

家族だからどんなに苦しくても切れない。同時に、最高最大の財産を手放すわけにはいかない。彼自身、新人を新しい子供が生まれたと考え、自分の睡眠時間を削っても教育した。自分の会社に入社したかぎりには、一人前の立派な男にするとして、薫陶し磨き上げた。そうなればますます財産といえよう。

——今、この時期になぜ出光に注目したのですか。

日本経済は1990年代から右肩下がりが続いてきている。したり顔の経済学者はリーマンショックを「100年に一度の大不況だ」として、どうしようもないかのように言ったりする。そこに2011年3月には東日本大震災が起こった。日本は大きな痛手を受け、世に一種のあきらめムードが広がっていった。

作家として東日本大震災後、こういう状況の中でいったいどういう物語を書いていけばいいのか、どういう人たちにどういふ小説を届けるべきなのかとしばしば悩んだ。その頃に出光佐三という男を知った。彼の95年の生涯、彼の生き方を追いかけていくと、「この男の生き方を今書かねば」とがぜん意欲が湧いた。小説は人々に生きる勇気を与えないといけぬ。いろいろな人が読んで、生きる勇気と喜びを持ってもらえる作品を書けたらいいと、それだけだった。

——戦後の状況はもっと過酷だったはずですが。

それが30年足らずで欧州の国々を追い越して米国に次ぐ第2の経済大国として復活した。すごい底力だ。そうできたのは、僕らの祖父世代が頑張ったからだ。それを考えると、今の日本はとても恵まれている。それなのに夢も希望もないなどは、恥ずかしくて言えない。

僕らにはそのDNAがある。自信を失っている経営者、労働者、日本人たちに、出光と出光を支えた男たちの生き方を知ってもらいたい。それが執筆のきっかけだった。

——それだけ主人公が魅力的だったのですね。

最高だった。こんなすごい男がいたのか、と。出光について名前ぐらいは知っていたが、この本のクライマックスを飾る日章丸事件についてはまったく知らなかった。五十何年生きてきて初めて知った事件だった。当時の新聞の縮刷版を見ると連日1面トップを飾っていた。日本が国際的な影響を与えた、その年に起きた最大の事件だったと思う。ところが、これが今日完全に歴史の中に埋もれてしまった。

イランへ原油を引き取りに行った日章丸の新田辰男船長も、イランとの契約を成し遂げた佐三の弟や重役も、それを支え抜いた部下たちも、とにかくすごかった。でも彼らだけでは絶対できなかった。当時の東京銀行あるいは東京海上火災保険、通商産業省があえて法律違反を犯してでも出光の決断を支える。あえて自分が犠牲になってでも出光を助けてやろうという、国のためを思うサムライたちが、銀行にも保険会社にも官僚にもいた。

——手前みそですが、本誌も終戦3日目の発売号に「前途は実に洋々たり」との社論を掲げ、出光佐三オーバーラップして見えます。

そう、出光だけではない。確かに出光は昭和20年代には奇跡のようなすさまじい働きをしたが、たかが従業員が100人や2000人の企業。それだけが頑張っても日本が復興するはずはない。当時、世のためと考える人たちがたくさんいた。だから奇跡の復興につながる。その後の高度経済成長も、数知れぬ「無名出光佐三」がいたからできた。この物語はそういう無名の人たちを象徴したものだ。

——今はまだ頑張りが足りない？

彼は生涯闘い続けた男。国と闘い、官僚や同業者と闘った。だから会社に銀行や官僚の天下りも入れなかった。官僚からしたら煙たい男だっただろう。日本の石油会社のほとんどがいわゆるセブンシスターズにのみ込まれていく。ところが護送船団から外れて一社だけ違うことをやる。

出光を絶対視するわけではないし、当時の時代背景もあったとは思ふ。あの生き方が現代でも通用するかといたらわからない。ただ、人に対する信頼という彼の信条はいつの時代にも通用する。

——読後の感想——

1. どんな困難にも耐えていく力は、誰にでもある。苦難時を思い、やる気力、闘う気力が必要。
淡路大震災、東北大震災も甚大ではあったが、戦時中、敗戦時の苦難を思えば越えられる！
日本は、1945年以降、68年間 戦争がなかった。なんと素晴らしいことか！
2. 人間尊重、信頼の持てる絆、助け合いは、強者も弱者も共通項目として必要。
六波羅蜜の実践(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)は:体力、精神力の向上になる。 -以上-

心もからだも健やかに

オパール・ネットワーク代表 佐橋 慶女

傘寿を迎えて祝いごとをまたもやして頂いて年を重ねることがめでたくも思えて—しかし、八十代になると思うと、複雑な気持ちと戸惑いにとらわれている今日このごろです。

先年、大阪支部で社会的支援制度などを勉強したり、高級、中級高齢者のマンションをいくカ所かみてきたりして戸惑いをおぼえていることも事実です。

でも、現在のひとり暮らしが健康で心もからだも快適なので、このまま、心身の病にかからないように心がけることにしています。

まず第一に健康を維持するために三度の食生活に気をつかうこと、私の場合、朝食と昼食を一緒に兼ねたブランチにはたっぷり栄養を考えたメニューにしてゆったりとあるときは音楽を聞きながら、テレビをみながら—おひとりさまの食事をとりまします。仕事とか交

友などを兼ねて外ですることもあり、いづれにしても一日のいちばん大切な食事を—と心がけています。

二番目に一日一回は家出をすること、遠近関係なく—できるだけノルディックウオーキングを心がけていること、仕事、交友、観劇、各種の鑑賞、催しに時間が許すときは出かけることに。一歩家を出たら必ずなにか学ぶもの、得るものがあるからです。食欲に心喜ばせの家出を楽しんでいます。

三番目に旅を楽しむこと、ひとり旅、友だちとの旅、パリ・ドイツ旅など、国内外問わず、旅をすることなど、続けることを心がけています。遊びと学び、交流がなによりも心身の栄養、滋養となっています。予期せぬ出会いがいっぱい私を待っていてくれます。そして、お酒を心おきなく友人、仲間と楽しむ

こと、これは酒、友人との絆として生きていく上でもっとも大切なこととして生きています。

季節・季節に旬、季節ものを訪ね、味わうのも最高の幸せ、これにつきます。

先日、ある新聞に要介護でも旅行したい—という記事が載っていましたが、ほんとに、家に閉じこもると、からだだけでなく、心も萎ぼむし、視野がせまくなって孤独になりがちだと思います。私の父も毎日外に出かけて、心がけています。心もからだも喜ぶのですもの。若さの滋養、健康の糧だと思えます。旅にはおいしいもの、酒・土地特有の名産が待っています。そして、地酒・地ワイン・地焼酎がウエルカムしてくれるのですから、たまたらない私の宝ものです。そして、出会いが必ずあるものです。

年を重ねても出会いという冒険にも似た遊びが味わえます。お酒が好きということで世間とのつながりが広がるなど、飲めることは最高の幸せと思えます。

オパールエッセー 1 クリスマス・イベントに思う

マーケッター 岡橋 葉子

例年、クリスマス時期は、街中が華やぎ賑わう。もみの木、ポインセチア、ひいらぎの赤と緑。イルミネーションに音楽。鐘の音、サンタクロース……祝いの小道具が揃う。

暗く寒い冬に向かうこの季節、クリスマスは明るさの象徴でもある。宗教がいつの頃からか、商業と結びついて、新年を迎える前の、一大イベントとして定着したのだ。

お手本は欧米である。実際、小売業は、年間売上げの七〇%以上を、このクリスマス商戦で

稼いでいる。ビジネス・チャンスなのだ。人が街に出てきてくれ、買い物をしてくれるからこそ、経済も回るのだ。まして、デフレになり、消費が不振だからこそ、熱が入るのだ。

東京・表参道の並木も、イルミネーションで飾られた。実に、十一年ぶりの復活という。明治神宮入り口から、青山通りまでの約一キロが、六十三万個もの発光ダイオードで彩られた。地元商店会が「不景気の中、表参道に

来る人たちを元気に」と、願いを込めたといい、一月十日まで続けられるという。「クリスマスは教会で」というポスターの前で、若い女性が叫んだ。「えッ、教会でもクリスマスやるの！何か売ってくれるの」。

これは実話である。キリスト教徒が人口の1%にも満たないわが国では、その程度なのであろう。

いまから約二千年前、この世を救うために神の子、イエス・キリストが馬小屋で誕生した。聖書はその日を十二月二十五日と記していないが、暗く貧しい世に光が降りたことを祝い記念として、全世界に広まった。

たとえ、キリストを知らず、商行為に乗せられていても、美しい飾りに感動したり、プレゼントをすることで心を通わせたり、虐げられ苦しんでいる人を思いやる心が、このイベントを通して生まれるならば、神も許し給うと思う。キリストの愛は、全人類に無償で無限なのだから。

●災害用伝言ダイヤルは171

いつ起こるか分からない災害。もしもの時の家族の安否確認には災害伝言ダイヤルがあることをご存知ですか。

災害が発生し被災地への通話が増加し、つながりにくくなった場合171番にかけ、音声ガイドに従い自分の避難場所を録音したり、家族が録音したメッセージを聞いたりできます。登録できるのは固定電話の番号ですが、携帯電話や公衆電話からも利用できます。

一伝言あたり30秒以内、録音してから48時間は保存されます。毎月一日、防災週間などに利用体験ができ、お正月は一日0時～三日24時まで受け付けています。

いざという時にスムーズに対応できるように、

暮らし・知っ得ヒント

家族が集まるお正月に家族で防災会議を開き体験してみませんか。

●ロコモティブシンドロームとは

ロコモティブシンドロームとは運動器機能低下症候群のこと、具体的には骨、関節、筋肉といった運動機能が衰えることにより、日常生活の中で自立度が低下し、介護が必要になったり寝たきりになる可能性の高い状態をいいます。実際、要介護や寝たきりの原因は脳卒中や認知症が多いですが、四人に一人は関節痛や転倒などによる骨折などの障害が原因です。予防は毎日のかんたん筋力トレーニング。●一日三回、片足で立って一分間保つ ●立ったままでくつ下をはく ●スクワット ●足踏みなどできることから始めましょう。

オパール・ネットワークとは

Old / Ordinary People in Active Life

高齢時代に心身とも健康で自立した生活をめざす活動を展開していきます。

●オパール・ネットワークの提唱

- 3つの自立 (精神・経済・生活)
- 3S運動 (シンプルで、スリムに、センスよく)
- 4R実践 (リフューズ、リデュース、リユース、リサイクル)
- 5つの貯え (知識・知恵、趣味、友人・仲間、健康、お金)

●オパール・ネットワーク憲章 (アイウエオ憲章)

- | | |
|------------|--------------|
| ア、明るく | カ、感謝の気持ち |
| イ、生き活きと | キ、協力者のおかげ |
| ウ、美しく | ク、苦勞を一つはかって |
| エ、笑顔で | ケ、健康で |
| オ、おもしろ、おかし | コ、公共のために奉仕する |